

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 吉田俊一郎

吉田俊一郎氏の論文は、ワレリウス・マクシムス (Valerius Maximus) の『著名言行録』 (*Facta et Dicta Memorabilia*) を、特にその修辞学的側面に焦点をあてて分析した我国では初めての研究であるのみならず、当時 (紀元後約 30 年) の修辞学の理論と実践 (特に模擬弁論) との関係、さらにラテン文学史上の位置に対して一定の見通しを与えた、射程距離の長い研究である。本研究は、「はじめに」と「結論」部分を除いて、全五章より構成される。以下、まずその骨子を紹介し、次に、研究史上の意義について述べる。

まず、第一章は、この著作に関する研究史および学説状況の概観にあてられ、第二章において、「修辞学的目的」説と「倫理的目的」説の対立状況が紹介される。これに対して、吉田氏は、ローマにおける倫理的範例集の伝統のもとに、修辞学校において模擬弁論が当時流行し、範例集を創作する動きがあったと推論する。

本論文の中核をなすのは、第三章及び第四章である。第三章では、模擬弁論文献 (主として大セネカの著作) と本著作に共通する八つの範例の比較検討から、ワレリウス・マクシムスは模擬弁論型の賛否両論併記ではなく、彼独自の新しい論点から一方の立場を正当化するために範例を用いていることを実証した。第四章では、修辞学理論に関連する七つの章を分析し、これらの章の中の範例が修辞学理論書を典拠としている、あるいは、章の構成が弁論術の体系に沿っているなど、修辞学理論の影響を具体的に跡付けている。

最後に、第五章では文体論の分析から、本著作における範例記述の構造を抽出するとともに、本著作をラテン文学史における黄金ラテンから白銀ラテンへの移行点として位置付けている。

本研究の最大の学問上の寄与は、従来アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスの三者に偏っていた修辞学研究に、ワレリウス・マクシムスの『著名言行録』という、直接的には修辞学書ではない作品を考察対象に据えることによって、修辞学研究の新しい可能性を開いた点にある。第一に、模擬弁論に対する比較のための豊かな素材として『著名言行録』提供した。第二に、修辞学がもつ倫理的、教育的目的は何かという難問に対する一つの回答として、範例集としての『著名言行録』というものを読者に提示した。

確かに、本研究には分析の不十分な点、論旨の不明確な点がないわけではない。例えば、修辞学的目的と倫理的目的という対置がどこまで有効かについて、本研究における議論は十分説得力があるとは言えない。また、本著作における文体論研究も、まだ表面的な点にとどまっているところがある。

しかしながら、このような問題点にもかかわらず、本論文は本邦初の本格的『著名言行録』研究であるとともに、ラテン修辞学研究に新平面を開いた研究であることは疑いの余地はない。本審査委員会は、本論文が博士 (文学) の学位に値するものと認定する。